

行き歸る人にかすそふ跡とめてこほりのみ踏む雪のなかみち

絶久戀十一月二十五日

年を経て今はかよはぬ我が中につけしちぎりの宇治の河はし

江 萩同月二十八日

舟よする波かたまがふ音たててさわぐ入江のかせのをぎはら
夕月夜ほの見しかげもなごりなく入江にひびく萩のうはかせ

寄世祝言十二月二十五日

いにしへに越えて百とせ國民のをさまれる世は末もかざらじ
行末も御代やすらかにくらすらし冬さへあらし風吹かぬ夜は

老少惜年同月二十八日

老の波かかるものとは行く年をおなじ小嶋の海人もやは知る
身につもる年とはなべて惜むとも知らじな老のまさる名残は

享保十七年

元日於京極黄門影前言志

春見えてのどけくもあるか新玉の年たちかへる今朝の日影は

同日於逍遙院内府影前言志

今日よりは年の日數をへだてにて八十の春もちりとなりぬる

歡遊不限年正月十四日御會始

治まれる時やうれしき民すらもたのしみつきぬ春かさぬとて
圓居してものの音あはす春の庭のたのしみいくよ柳さくらに

民すらとよめる歌猶可勤心也 逍遙院君みすや木すらかひすら鳥すら

もいもせにものふかきなさけた木すらかひすらいづれも歌に無所見

歎萬葉におきになづさふかもすらもつまとたぐひてとよめり。これを本

として、かひすら、鳥すらなどよめるなり。萬葉十七長歌に、おほ君のまけの

まにまにしなきかるこしなをさめに
出てこしますらわれすらとありま
すらは、ますらのをの字を略せる
なり。われすらといへる例にて、
民すらともいふべきか。古き長歌、
かな序のたぐひやらむにて、見
およびたるやうなり。又子等手
巻向山は云云、去來兒等香椎の
かたに云云、か様の類は萬葉
に繁多也。國栖等は各別也。國
栖の事也。

松齡久 正月二十五日

神がきの松にならばむよはひを
も八十にちかき春よりぞ知る
頼みおきてやそちもちかし神垣
の松やひさしき知る人にせむ

雪中春來 二月四日

來る春はさらでも見えぬ野邊に
今朝千里の春をうづむ雪かな
野山にも來るあと見ゆる春なら
ば今朝の雪にや出でて迎へむ

橋上苔同

むす苔のいろぞかさなる板橋の
朽ちぬるかたは人もかよはで

朽ち残る板田のはしにむす苔の
としふる色やまづこふるらむ

遠山霞薄 同月二十五日

霞むともここにまだ見ぬ春の
いろを遠山眉ぞにほひそめぬる

不言思戀 同

我が心さのみいは木になしは
てばいつうち出でむ思なるべき

暮村竹 同月二十八日

暮れゆけば里の夕げのそれなら
で竹のけぶりにむかふ山もと
いくさとの煙たなびき暮れぬら
む山本かこふたけのこす忍に

内閣文庫藏本奥書

右七册者 靈元院御製也

傳聞稱桃葉集謹書寫之不可許他見者也

享保二十年孟夏三五日

二品深譽尊胤

右華頂御殿之御秘本也嘉永二酉年壬四月恩借シテ寫ス

字ノ誤ハ原書ニ據ル得他本可校訂

臣吉順等謹書

靈元天皇御幼時御製

寛文三年御十歳

鶯有慶音二月十二日御會始

うぐひすのこゑものどけき久方の雲井の春は千代もかざらじ

若 菜 同月二十二日水無瀬宮御法樂

春の日の恵あまねき雪きえていづれの野邊もわか菜摘むらむ

海邊霞同月二十五日聖廟御法樂

波風もかすみわたりにて治まれる世のすがたなる春のうみづら

早春山六月二十五日同

み雪ふる山もかすみて千里までひかりのどかに春や立つらむ

靈元天皇御幼時御製

三九七

寛文四年御十一歳

竹不改色 二月十日御會始

すなほなる心の友とうつしうゑて千代の色そふ庭のくれたけ

朝 鶯 同月二十二日水無瀬宮御法樂

朝まだきこゑものどかに九重のはるを知らする園のうぐひす

初春風 同月二十五日聖廟御法樂

吹く風の聲もをさまる雲の上に今朝たちかへる春ののどけさ

初 春 同月二十五日同

風渡るみぎはのこほり解けそめて春をしらする池のささなみ

寛文五年御十二歳

春祝言 正月十九日御會始

吹く風のこゑものどけし百敷や軒端のまつの千代のはつはる

早春鶯 二月二十二日水無瀬宮御法樂

いとはやも古巢をいでて九重にはるを告げくるうぐひすの聲

連峯霞 同月二十五日聖廟御法樂

おしなべて春や立つらむ遠近のかさなる嶺にかすみたなびく

春 同月六月二十五日同

見るままに霞みてふくる春の夜のならひもつらき月の影かな

雪 同

都だにまなくときなく降る雪のいかに深山をうづみはつらむ

菊綻禁庭 九月九日

いく千代の秋をちぎりて九重に今日咲きそむる庭のしらぎく

寛文六年御十三歳

靈元天皇御幼時御製

初春待花 正月十九日御會始

さくら花はや咲き匂へももしきや風ものどけき春のかざしに

野 霞 二月二十二日水無瀬宮御法樂

朝な朝な雪間の草もいろ添ひてかすみわたれる春日野のはら

庭 梅 同月二十五日聖廟御法樂

飽かずなほ人もとひくるわが宿の軒端の梅のはなぎかりかな

夕紅葉 六月二十五日同

あかず見む梢にあきのきりはれて夕日うつろふ峯のもみぢ葉

星夕言志 七夕

幾よろづ世世に絶えせじ天の河ちぎりしままの今日の逢瀬は

寛文七年 御十四歳

松色春久 正月十九日御會始

ももしきや大宮人のよろづ代を葉がへぬ松のはるにちぎりて

朝 鶯 二月二十二日水無瀬宮御法樂

朝な朝なこゑの匂を梅が香にいとと添へてやうぐひすの鳴く

欸 冬 同月二十五日聖廟御法樂

吉野がは散りぬる花のなごりとや春行くみづに匂ふやまぶき

關早春 六月二十五日同

關の戸も明けゆく春にあふさかの山よりやまや霞みそむらむ

里 雪 同

白妙にまつも檜原もうづもれて誰が里わかぬゆきのあけぼの

織女期秋 七夕

恨むなよ秋の一夜もたえせじの行くすゑとほき星のちぎりは

菊花色色 重陽

咲く菊の花のちぐさにおく露ももてはやされて匂ふいろかな

故郷鶯

春きてもなほ白雪のふるさとにひとりのだけきうぐひすの聲

曙霧

立ちこめて野山もわかぬ霧の中になほ白みゆくあけぼのの色

殘菊

見し秋のはぎは尾花はかれてしもあかず色そふ霜のしらぎく

寄月戀

有明の月はたもとにくもれたただあかぬその夜の形見とも見む

見書戀

言の葉のうきいつはりを思ふにもなほ頼まれぬ仲のたまづさ

寛文八年御十五歳

禁中佳趣 正月十九日御會始

よろづ代の春にこそ見め梅つばや咲きそふ花のあかぬ色かも

漸待花 二月二十二日水無瀬宮御法樂

みよし野や花まつころの朝な朝なおもかげにほふ峯のしら雲

山 霞 同月二十五日聖廟御法樂

目にちかき都のふじの山も今朝春にかすめるいろぞうへなき

早春鶯 同

うぐひすも千代の始のはるや知る今日九重のけふのむしろに

更衣 四月二十一日

白妙にみなたちかへて蟬の羽のうすきころもの色もすすしき

早苗 六月二十五日北野社御法樂

このゆふべ千町の早苗植ゑたててみどりになびく風の涼しさ

松 同

絶えせじな世世のことばの手向草このかみ垣の松にちぎりて

靈元天皇御幼時御製

七夕天象七夕

神代よりさだめおきてや久方のあまつ星合のそらだのめなき

十五夜月八月十五日

ことさらの光もそひぬ秋もあきなかばの空のつきのさかりは

寄月戀同

人しれず包むなみだをわが袖にもとめてやどる月もうらめし

菊契千年重陽

露のまも千歳のあきを契るらし我がここのへの庭のしらぎく

十三夜月九月十三日

あかず見む今夜は月もなが月のかげになかばの秋もわすれて

橋落葉十月二十四日

山人のふみわけて行くあともをし紅葉をしける谷のかけはし

冬山月十一月二十三日

白雪のひかりもそひて山の端は秋よりけなるつきぞかがやく
山はみな木木のこすゑの冬枯に待ちいづる月の影もさはらず

春夜

窓ちかく梅咲くころは深き夜のあはれも更に似るときぞなき

擣衣幽

身にぞしむ夜さむの風の誘ひくる賤のきぬたの里とほきこゑ

寛文九年御十六歳

瀧音知春正月十九日御會始

いははしる音まさるなり春風に瀧のみなかみこほり解くらし

柳垂絲二月二十二日水無瀬宮御法樂

くりかへし長き日あかず青柳のみどりの絲にはるかせぞ吹く

早春朝同月二十五日北野社御法樂

靈元天皇御幼時御製

山の端の雲もさながら朝日かげかすみに匂ふはるのいろかな

首 夏六月二十五日北野社御法樂

をりにあふ色にもあるかな宮人のたもと涼しく白がさねして

氷室同

あつき日もよそにへだてて時しらぬ氷室の山の木木のした蔭

星河秋興七夕

たなばたの逢瀬やいかに月しろく夕風きよきあまのかはなみ

十五夜月八月十五日

身のほどを思ふもやさし世におほふ名高き今日の月に向ひて

池邊菊重陽

咲く菊のいろいろごとに池水のいひしらぬ千代の影を浮べて

いく千代の色をふかめて池水に今日咲く菊のかげうつすらむ

百首題之内十首

山早春

春とともに峯の霞もたちそめてほのぼの明くる色はしづけし

落花隨風

春ふかき日かずだにある花にうき嵐よせめてこころして吹け

暮春藤

なつかしき色にもあるかな藤の花なほ咲き残る春のかたみは

五月雨晴

さみだれも限ある空はくも晴れてみどりにかへる色も珍らし

七夕別

またとだにえしも契らじたなばたはさぞな今はの心さわぎに

江月冷

難波潟いろかはる秋のいろもなき入江の月ぞさらに身にしむ

曉聞千鳥

靈元天皇御幼時御製

夢をさへあかつき深く呼びかはす聲もさむけきとも千鳥かな

難忘戀

へだてゆく心にも似ず面影のわすれがたみに身にそふもうし

古寺鐘

住むやたれ入相の鐘のこゑにこそありとばかりの峯のふる寺

述懐多

やすかれと世を祈りてもなほぞ思ふまたもろもろの道の榮を

時 雨十月十四日

風の上に曇りみ晴れみ行く雲やさぞな生駒のやますしぐるる

寒 蘆同

白妙に霜のふりはもみだれあしの中にはえある池のをしかも

忍 戀同

人も知れおなじうき名をしのお草それも思の種にやはあらぬ

立 春同

天つそら今朝は霞のひかりより春に明けゆくいろもめづらし

神 樂同

絶えせじなまさきのかづらかけまくもかしこき神のよよの遊は

寒樹交松十一月二十四日

春秋の咲きちる色をよそに見てものおもひなき松のいろかな

深夜埋火同

雪霜のふかき夜知らで思ふどち語らひあかすうづみ火のもと

披書逢昔同

百敷のむかしを今にとばかりもしのぶに餘るふみにむかひて

澤若菜十二月二十四日

きのふ今日雪もひまそふ春雨のふるのの澤にわか菜つむらし

靈元天皇御幼時御製

寄鏡戀十二月二十四日

身にそふもうしや思のますかがみかけはなれゆく人のおも影

御製集第九卷終

(岡田三郎助意匠) (複製本)

御製集第九卷

〔非賣品〕

大正五年七月十二日印刷
大正五年七月十五日發行

版權所有



編纂者

列聖全集編纂會
東京市麴町區内幸町一丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎
東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一二七番
振替東京二九八八番

列聖全集編纂會

終